

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高倉天皇は、幼くして帝位に就いた。

去んぬる^(注) 承安^(しやうあん)の頃ほひ、御在位のはじめつかた、御年十歳ばかり

(天皇になられた初めの頃)……

にもならせたまひけん、あまりに紅葉を愛せさせたまひて、^(注) 北の陣に

小山を築^つかせ、櫓^{はじ}、楓^{かへで}の色美^はしうもみぢたるを植ゑさせて、紅葉の山と

(紅葉したものの)……

名づけて、終日^{ひねもす}に^{えいらん}覧あるになほ飽き足らせたまはず。

しかるを、ある夜、野分^{のわき}はしたなう吹いて、紅葉みな吹き散らし、落

(暴風が激しく)……

葉すこぶる狼藉^{ろうぜき}なり。^(注) 殿守^{とのもり}の伴^{とも}のみやづこ、朝清めすとてこれのこと

(乱雑である)……

ごとく掃き捨ててんげり。残れる枝、散れる木の葉をかき集めて、風す

さまじかりける朝^{あした}なれば、縫殿^{ぬひどの}の陣^{ちん}にて、酒あたたためたべける薪^{かき}にこ

そしてんげれ。奉行^(注)の蔵人^(くらんど)、^(注) 行幸より先にと急ぎ行^ゆいて見るに、跡

かたなし。「いかに。」と問へばしかしかと言ふ。² 蔵人^{くらんど}、大きに驚き、

「あなあさまし。君^{きみ}のさしも執^{しつ}し思^{おも}しめされつる紅葉を、かやうにしけ

(天皇があれほど執着しておられた)……

るあさましさよ。知らず、汝等^{なんぢら}、只今^{ただいま}、禁獄^{きんごく}流罪^{りゆうざい}にも及び、わが身も

(お前たち)

いかなる逆鱗^{げきりん}にか預^よからんずらん。」と嘆くところに、主上^{みじやう}、いとど

(天皇からどのようなお叱りをうけることだろう)……

(天皇は、いつもより

しく夜のおとどを出^いでさせたまひもあへず、かしこへ行幸なつて紅葉を
いつそう早く御寢所から出てこられるとすぐ)……

覧なるに、なかりければ、「いかに。」と御尋ねあるに、蔵人奏すべき

(申し上げよ)

方はなし。ありのままに奏聞^{そうもん}す。^(注) 天氣ことに御心^{みこころ}良げにうち笑ませた

うかない)……
(申し上げる)

まひて、『^(注) 林間煖酒焼紅葉』といふ詩の心をば、³ それらには誰が教^た

へけるぞや。やさしうも仕^{つかまつ}りけるものかな。」とて、かへつて叡感^{ゑいかん}に預^よか

(風流にもいたしたものだ)……

(お褒めに預か

つし上は、あへて^(注) 勅勘^{ちくかん}なかりけり。

った)……

(「平家物語」から。)

(注) 承安Ⅱ平安時代の年号。一一七一～一一七五年。

北の陣Ⅱ天皇の住まいの北側にある門。「縫殿の陣」ともいう。

殿守の伴のみやづこⅡ天皇の住まいで、庭の掃除などをする人。

蔵人Ⅱ天皇の近くで仕える人。

行幸Ⅱここでは、天皇が来ること。

天気Ⅱ天皇の機嫌。

林間煖酒焼紅葉Ⅱ書き下し文では「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」

と書く。中国の詩人、白居易の詩の一節。

勅勘Ⅱ天皇が罪を責めること。

問1 ———線1「終日に覧あるになほ飽き足らせたまはず。」とあるが、

それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 高倉天皇は、小山の紅葉を一日中独り占めするのはもったいない
と思い、多くの人たちと一緒に紅葉を眺めているということ。

2 高倉天皇は、小山に木を植えさせただけでは満足できず、紅葉が
美しい他の山へ出かけて一日中紅葉を眺めているということ。

3 高倉天皇は、小山の紅葉を一日中眺めているうちに物足りなく感
じ始め、紅葉している木を増やそうとしているということ。

4 高倉天皇は、小山に植えさせた紅葉を一日中眺めていてもまだ眺
め足りないと思うほど、紅葉に夢中になっているということ。

問2 ———線2「蔵人、大きに驚き」とあるが、その理由として最も適

するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 紅葉した木は暴風で葉が散らされたことで観賞に向かなくなつて
しまったが、「殿守の伴のみやづこ」が機転をきかせ、高倉天皇が暖
をとるための薪として枝や葉を役立てたから。

2 暴風が吹いて散らばった紅葉を「殿守の伴のみやづこ」が片づけ、
残っている枝なども酒をあたためるために燃やしてしまった結果、
高倉天皇が見る紅葉がなくなってしまったから。

3 見頃を迎えた紅葉が暴風によって散らされてしまったことに「殿
守の伴のみやづこ」がいち早く気づき、紅葉の様子を見た高倉天皇
が悲しむことのないよう、燃やして片づけたから。

4 酔っ払った「殿守の伴のみやづこ」が紅葉の山に無断で立ち入り、
酒をあたためようとして散り落ちた葉に火をつけたことで、高倉天
皇が植えさせた紅葉まで燃えてしまったから。

問3 ―線3「それらには誰が教へけるぞや。」とあるが、そのように

言ったときの高倉天皇を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節を「殿守の伴のみやづこ」がうまい具合に再現したのを見て、立場に合わない振る舞いをしたものだとからかっている。

2 自分を喜ばせようとした「殿守の伴のみやづこ」が「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節をひそかに学んでいたということがわかり、心を動かされている。

3 「殿守の伴のみやづこ」の行動を「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節と照らし合わせることで趣のある振る舞いとして捉え、感心した態度を示している。

4 ずっと前に自分が教えた「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節を「殿守の伴のみやづこ」が覚えており、見事に詩の場面を再現してみせたことに驚いている。

問4 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 目覚めてすぐに紅葉の様子を見に来た高倉天皇は、処罰されることを「蔵人」が恐れる中で「殿守の伴のみやづこ」の行動を褒め、誰にも罰を与えることはなかった。

2 気分良く目覚めた高倉天皇は、「蔵人」の心配をよそに紅葉の様子を受け入れ、「殿守の伴のみやづこ」の働きによって新たな楽しみ方に気がつけたことを喜んだ。

3 いつもより早く目覚めた高倉天皇は、紅葉の様子をただけで何が起こったかを把握して「殿守の伴のみやづこ」の行動を許し、「蔵人」に事情を尋ねることはなかった。

4 紅葉の様子を心配して早く起きた高倉天皇は、言い訳ばかりする「蔵人」にあきれ、事情をありのままに報告した「殿守の伴のみやづこ」の正直さを高く評価した。

問 4	問 3	問 2	問 1
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④

問 4	問 3	問 2	問 1
1	3	2	4

--	--	--	--

問1 高倉天皇が紅葉好きであることは傍線部1の前で説明している。高倉天皇は小山を築かせ紅葉した木を植えさせて「終日に翫覧あるに（一日中ご覧になつても）」、「飽き足らせたまはず（満足なさらない）」ということなので、4が適切。

問2 蔵人が驚いた理由は傍線部2の前の内容から読み取る。夜の暴風のために紅葉がほとんど吹き散ってしまったので、庭の掃除をする人（殿守の伴のみやづこ）が残った枝や葉もかき集めて薪にしたことを知ったから驚いたのである。つまり、天皇が見る紅葉がなくなってしまうことを蔵人は嘆いているので、2が適切。

問4 **ポイント** 選択肢の内容から文章後半の自分の愛した紅葉の葉や枝が薪になってしまったことを知った高倉天皇の様子が焦点となっていることを捉える。この場面では、天皇は白居易の詩の一節を取り上げ、殿守の伴のみやづこの行為を風流だと褒め、「あへて勅勘なかりけり（罪を責めることはなかった）」とある。よって1が適切。